李碧華『覇王別姫』に表れた女性観と香港意識

小林さつき

はじめに

「香港文学」という語が一般に使われだしたのは一九七〇年代以降で、香港及び大陸中国の研究者により香港文学の研究が本格的に着手されるようになるのは一九八〇年代に入ってからのことである。

現在でも香港文学の存在自体を疑問視する声もあるが、「本地意識」[1]の高まりとともに「中国人」と分離した「香港人」としての自覚が生じ、香港文壇において大陸作家にかわって活躍し始めた香港作家によって、「香港中文」や「夾雑文」[2]など大陸中国で用いられている中国語とは若干異なる文体を用いて書かれた文学作品を「香港文学」と称するのは自然な流れといえる。

これまでの香港文学研究及び批評は、多く中国文学の枠組を踏襲する「純文学（厳粛文学）」[3]に分類される作品を対象として行われてきた。しかし実際に香港の文化、流行、香港人の生活を色濃く反映しているものは「大衆文学（通俗文学・流行文学）」に分類されている作品であるが、それらは価値のないものとみなされ、純文学作家及び研究者が敷いた厳格な縄張りの周縁へと追いやられてきた。

現在行われている香港文学研究の主題目は「香港アイデンティティー」の探求であるといえるが、香港文学に表れた「香港アイデンティティー」を分析するのであれば、香港人に広く受容されている「大衆文学」に分類されてきた作品を見ていくほうが有効である。

香港人における受容の広さという点において群を抜いているのが、女性作家、李碧華の作品である。彼女の作品は、文字としてばかりでなく、映画やテレビ、ラジオなどのメディアと結びついて、広く香港人の生活の中に入り込んでいる。

一　香港作家・李碧華について

多くの香港流行女性作家が、著書ばかりでなくブロマイドを発売して芸能人のような活動を行っているのとは対照的に、香港大衆文学を代表する作家・李碧華は謎に包まれている。彼女のインタビュー嫌いは有名で、顔写真はおろか履歴さえも公表しておらず、李碧華の活動の場が深くマスコミと結びついていることと考え合わせると非常に興味深い。

李碧華の経歴について、数篇の資料[4]及びインターネットのホームページに紹介されている略歴と、筆者が二〇〇〇年八月に行った李碧華へのインタビューに基づき、現在明らかになっていることを以下にまとめる。

生年は不明、出生地は香港。学生時代に『中国学生周報』[5]、『学生園地』等の文学雑誌に投稿を始め、高級中学を卒業後も、小学校の教員や、中国舞踏の講師などを勤める傍ら、執筆活動を続けた。多彩な職歴を持ち、本業として作家活動を始めてからは、新聞などのコラムを担当し、小説を出版する一方、テレビドラマのシナリオ[6]、映画の脚本[7]、舞台劇プロデュース等も手掛けている。日本での留学を二年間経験しており、京都大学で文学を学んだ。

一九八二年に初の散文集『白開水』を出版して以来、二〇〇〇年十月現在に至るまで、小説や散文などの単行本だけでも五十三冊出版され、その多くがロングセラーを続けている。代表作には、歴史的検証をもとに書かれた『胭脂扣』や『秦俑』、『川島芳子』、天安門事件を題材として若者の心理を描いた『天安門舊魄新魂』等があり、その多くは映画化され、高い興行成績を上げている。

李碧華は筆が早く、発表作品の多さには目を見張るものがあるが、その作品には、入念な調査、検証をもとに書かれた歴史小説やルポルタージュがある一方、自らの作品を商品化し、香港大衆文学の特徴といわれる「軽、薄、短、小」[8]という条件を満たした、読み捨てられる暇つぶし文学（消閑文学）に類するような散文や小説も多く手掛けている。このような、文学を商業化する活動によって、狭い縄張り意識を持った批評家から通俗作家として低い評価を与えられてきた。[9]

しかし、このような李碧華に対する評価について疑問を抱いている研究者もいる。李焯雄は「名字的故事――李碧華《胭脂扣》文本分析」において、香港文壇における文学研究及び批評が、「純文学（厳粛文学）」と「大衆文学（通俗文学）」という安易な分類によって行われており、李碧華が流行作家であり、作品の商品価値が高く、作品発表の場が「純文学」とは完全に分離された娯楽大衆誌の類であるといった理由で、いわゆる「正統」な研究の対象とさえみなされない香港文学批評の問題点を指摘している。さらに、そのような文学批評が、「純文学（厳粛文学）」と「流行文学」とを対立項として捉えているのと同時に、「中国現、当代文学」と「香港文学」とを対立項として捉えていることを指摘し、李碧華という香港作家を含めた「香港文学」を「周縁（marginal）」及び「他者（the other）」の地位へと追いやっていると述べている。[10]

そのような従来の文学批評への批判と、近年盛んになってきた普及文化（popular culture）研究の流れを受け、規

範となっていた大陸中国文学観にとらわれない視点からの香港文学研究が行われるようになり、李碧華の作品も見直され、作品研究が進められるようになってきた。

以下では、香港作家・李碧華が大陸中国の五十年余りにも及ぶ歴史を背景として、中国伝統芸能である京劇の世界を描いた『覇王別姫』に、如何に香港作家としてのアイデンティティーが表れているかを見ていくことにする。

二　小説『覇王別姫』

伝統芸能の京劇役者の愛憎と現代中国の波乱の歴史を描いた長編小説『覇王別姫』は、一九八五年に初版が出版されて以来、現在もロングセラーを続けている。中国第五世代の監督、陳凱歌によって映画化され、一九九三年のカンヌ国際映画祭でグランプリのパルムドール賞を獲得し、世界的な評価を得た。[11]

小説『覇王別姫』の原型は、香港電視が一九八一年に製作した九十分ドラマのシナリオとして執筆されたもので、それを李碧華自身が小説として書きなおした。テレビドラマのシナリオ版と小説版とは、基本的な人物構成、やストーリー展開において大きな相違はない。しかし、映画化にあたっては原作者の李碧華が脚本を手掛けているものの、陳凱歌監督の要請で、内容やストーリー展開が大きく書き換えられている。

小説『覇王別姫』の舞台は一九二九年冬の北京から始まる。親子二人、貧困に喘いでいた小豆子（後の程蝶衣）の母は、生きていくため娼婦となった。男子であった小豆子は妓楼にはいられず、京劇養成所にあずけられる。そこで兄弟子の小石頭（後の段小楼）と出会い、厳しい訓練をともに耐え抜く。その華奢な美しさを買われた小豆子は、徹底した旦役（女役）としての訓練を受け、立派な役者に成長し、小石頭も強くたくましい生役（男役）となる。

抗日戦争が激化する中、一世を風靡する京劇役者になった二人は『覇王別姫』を十八番とし、一生ともに歌いつづけようと誓う。しかし小楼が妓楼で見初めた妓女の菊仙と結婚したことで、虞姫と自分との区別がつかなくなっている蝶衣は激しい嫉妬の念にかられ、二人の間に溝が生まれる。

抗日戦争が終結したのも束の間、国共内戦が始まり、二人は京劇役者として、時に国民党政府から、時に共産党政府から攻撃され、時代の波に翻弄される。そして文化大革命が始まり、革命運動の波が高まると、京劇役者はその批判運動の槍玉に挙げられる。互いの批判を強制された二人は、次第に理性を忘れて互いを罵り合う。そして妓女であった妻、菊仙へとその批判の矛先が向かうと、妻を助けるため小楼は離婚を宣言する。その言葉に絶望した菊仙は自ら命を絶ち、小楼と蝶衣は労働改造所へ送られ、その後小楼は香港へ亡命する。

時代は移って一九八〇年代の香港。小楼は路面電車の運転手をしながら孤独な生活を送っていた。そしてある日、京劇劇団の芸術指導として香港公演にやってきた蝶衣と再会を果たす。蝶衣は名誉を回復され、共産党幹部の紹介で結婚し、北京で穏やかな生活を送っていた。

二人は観客が去った劇場の舞台で十数年ぶりに『覇王別姫』を演じる。クライマックスにさしかかり、蝶衣は衝動に駆られて自分の首に真剣をあてる。その流れ出た血で、劇の終幕を実感し、自らが生きてきた人生の全ては劇に過ぎなかったと悟るのであった。そして二人は別れ、蝶衣は北京へと帰っていき、小楼は返還への不安が高まる香港の街で以前と変わらず孤独な生活を続けるのであった。

物語は、時代の波に翻弄される二人の京劇役者の愛憎劇に、伝統芸能の京劇の細かく鮮明な描写を織り交ぜ、激動の中国を背景として描かれている。

映画『覇王別姫』との大きな違いはその結末にある。映画の結末では、香港の部分が消されており、文化大革

命が終りを告げ、北京に戻った二人が人気のない体育館で十一年ぶりに『覇王別姫』を演じ、蝶衣は虞姫さながらに真剣で命を絶ち、愛を貫き、愛のために死んでいく。これは監督陳凱歌が特別に李碧華に書き換えを要請したものだというが、この書き換えに関して、李碧華は大いなる不満の念を抱いたという。[12] その不満とは一体どこから来ているものであろうか。

三　二人の「女性」蝶衣と菊仙

多くの香港流行作家がハッピーエンドのラブロマンスを描いているのに対し、李碧華の小説において、いわゆる「聖女」や幸せな女性が登場し、幸せな結末を迎えるものは少ない。描かれている女性の多くが、妓女、あるいは不幸な状況下に身をおく女性である。小説『覇王別姫』には女性はたった二人しか登場しないが、その二人ともが娼婦、妓女として、男性に従属して生活の糧を得ている女性という設定で描かれている。

香港文学研究者の陳麗芬は「普及文化與歴史想像—李碧華的聯想」の中で、李碧華の作品の中には女性を蔑視するような表現が多く見られると述べている。[13] また、李碧華が男性であるか女性であるか知らない香港人が多いのだが、それは、公の場に決して姿を現さず、経歴を公表しないことに因るだけでなく、その女性描写によって与えられるイメージに起因するところも大きいのではないだろうか。

小説『覇王別姫』において、冒頭にわずかに登場する蝶衣の母を除けば、菊仙は唯一の女性登場人物といえる。その気位の高さと美しさで妓楼の看板妓女であった彼女が、あらゆる手段を講じて憎らしいほどしたたかに生きていく姿が描かれている。

しかし、物語にはもう一人の「女性」[14]が存在する。それは、男性として生まれながら「女性」として生きるよ

り他なかった蝶衣である。京劇養成所で旦役として訓練された蝶衣は、女性以上に「女性」的にステレオタイプ化された女性としての役回りを担わされている。

映画において蝶衣は同性愛者とされ、同性愛が大きなテーマとなっているが、小説では同性愛に関する表現はほとんどない。小楼が結婚したことで菊仙に対し強烈な嫉妬の念を抱くが、それは、劇と現実とが錯綜し、小楼の結婚を虞姫である自分を愛し守るべき覇王の裏切りと錯覚し、覇王・小楼と対になるべき自己の存在意義の揺らぎからくる不安に襲われたためで、蝶衣が同性を恋愛の対象として見ていることを感じさせる表現は見られない。

蝶衣のトランスジェンダーは明らかに後天的なものであり、徹底された教育によって形成されたものであった。京劇の役にはまりこんだがために、自己と虞姫とを混同させていた蝶衣にとって、覇王を演ずる小楼への感情は、同性愛ではなく、まぎれもない異性愛である。

妓楼の世界では男子の存在は許されず、男という性をもって生まれてきたがために母に捨てられた蝶衣は、皮肉にも男性社会の京劇という世界の中で「女」として生を与えられた。役柄を割り振られるという、将来の京劇役者にとっては大事な日に、蝶衣は京劇の演目『思凡』のセリフを覚え、師匠の前で演じなければならなかった。しかしその中の一節「私はもとは娘でございます。男子ではありません。」というセリフを何度練習しても「私は男子であり、娘ではない」と言い間違えてしまう。心配した小楼は、「自分を女だと思え」と蝶衣に繰り返し言い聞かせ、自分でも「僕は女だ」と暗示をかける。しかし、結局師匠の前でもセリフを言い誤り、師匠にキセルで口の中を何度も打たれる。蝶衣は血まみれになりながら小楼の言葉を思い出し、正しくセリフを言い切って晴れて旦役を与えられる。この時から、蝶衣は自己を「女性」だと認識するようになり、ペアを組まされた小楼を従属すべき男性として意識し始めるのである。

しかし、蝶衣が認識した「女性」とは、実体のある女性ではなく、男性優位社会において男性の側から与えられたイメージとしての「女性」であり、徹底的な教育と暗示によってそのような「女性」として自己を認識するようになった蝶衣は、父系社会の中で「女性」としてのあり方の概念を植えこまれてきた女性と重なるのである。

そして小楼の愛を奪い合う宿命の相手菊仙の登場によって、小楼への愛を共通項として互いに反目し合い、「聖女」としての女性像を背負わされた蝶衣と「悪女」としての女性像をもつ菊仙との対比を構成の柱として物語は進んでいく。その二人の対比は歴史的、政治的苦境において、より一層鮮明に描き出される。

抗日戦争時、日本批判をした小楼は日本軍に捕らえられ、ひどい拷問にあう。あれこれ思い悩み行動を起こせない蝶衣を、小楼と離婚すると嘘の約束で言いくるめて日本軍の前で京劇を歌わせ、小楼を救い出したのは菊仙であった。当然のごとくその約束は破られ、だまされた蝶衣は菊仙に対して更なる憎悪を抱く。そして、日本軍の前で芸を売った売国奴として蝶衣が国民党に捕らえられたときも、蝶衣を救う行動を起こしたのは小楼ではなく菊仙であった。小楼が共産党軍と舞台の上でもめごとを起こし、乱闘騒ぎになったときも、菊仙は身重であったにもかかわらず、危険を顧みず小楼を助けようと暴れまわる男たちに立ち向かい、腹部を強打され流産してしまう。

李碧華は、舞台の下では空回りする小楼や蝶衣にかわり、女性である菊仙に実際の行動を起こさせている。

そして、文化大革命に至って、紅衛兵らに互いの批判を強要された蝶衣と小楼は、演ずることも理性をも忘れて互いの触れられたくない部分までもえぐりだす。そこには人生をかけて演じてきた英雄・覇王も貞女・虞姫も存在してはいなかった。そんな二人を我に返らしめたのが、蝶衣が淫売だとさげすみ続けてきた菊仙であった。菊仙は貞女・虞姫さながらにどんな拷問にも屈せず、最後まで夫への愛を貫こうとする。しかし、それがかなわぬ

と分かると自ら命を絶つ。

その美しくも悲しい最期をみれば、「貞節を守った清らかな女性」としての役回りをもつ虞姫を蝶衣にかわって演じきったのは菊仙であったと見ることができる。しかし、過去において菊仙は、男性優位社会では下層部に置かれる妓女として、「男性の視点」から見た「不道徳者」と蔑まれながら生き抜いてきたのである。

菊仙はいつも望むものを手に入れてきた。如何にすればそれらを手に入れられるかを常にしたたかに計算していた。最期に自分で自らの命を絶ったのも、自由を得るために選びとった自らにとって最良の結末であった。死を選んだことが、逆に限りなく強い生命力を感じさせるのである。

そして二人の対比においてもうひとつ重要な点は、社会の中で役者として見下されていた蝶衣が、同じく妓女ということで不道徳者扱いされ、「他者」として社会の「周縁」に追いやられていた菊仙を、自分を「他者」へと追いやってきたはずの「主体」の視点から見て軽蔑し、その矛盾に気づいていないという点である。それに反して、菊仙は蝶衣に対し、夫の愛を二分する存在として強烈な嫉妬の念に駆られながらも、時には同情し、時には母のように深い情をもって接するのである。

二極化された女性像を背負わされた二人の女性を対比させることで、実際の女性である菊仙の強靭な生命力と存在感とが強烈に描き出されている。李碧華の作品に女性蔑視と感じられる表現が見られるのは、男性の視点から見た女性描写を利用した李碧華特有の反語的表現なのである。

四　書き変えられた結末と英雄主義

京劇『覇王別姫』の中の覇王・項羽は典型的な英雄として描かれている。自らの命の危険を顧みず、国をそし

て愛する女性を守ろうと最後まで戦い抜いた勇士として存在している。そしてその英雄に守られた虞姫は、また覇王の身を案じ、足手まといになることを恐れて自害を図る。京劇『覇王別姫』は美しき悲恋の物語である。そのような大陸中国においては典型となっている「英雄」「貞女」の悲恋物語を演じている二人の役者に、香港作家・李碧華はなぜ、現実の世界ではその役を演じきらせなかったのであろうか。

以前、香港において「中華英雄」という漫画が大流行した。子どもから大人まで人気を博し、映画化もされた。武術に長けた主人公が悪者を打ち倒すという内容であるが、ここで興味深いのが、そのヒーローも、決して聖人君主の類ではないということである。

現在、香港にはアニメ、小説、映画等のジャンルにかかわらず勧善懲悪型の英雄の存在は認められない。アメリカであればスーパーマン、日本でいえばウルトラマンといった世界を救い、地球を救う英雄は過去において、そして現在に至っても香港には未だ出現していないのである。

香港で生まれ、香港人にとっては経典となった新武侠小説[15]も、武術に長けたヒーロー（ヒロイン）が、華麗なる武芸で何千もの敵を倒していくという展開のものが多いが、日本ではお馴染みになった勧善懲悪や世直しといったことが彼らの目的ではなく、肉親や武術の師匠の「報仇（あだ討ち）」こそが彼らに課された偉大なる使命なのである。

以上のような状況は、香港という都市が、歴史的に信頼し帰属する国家あるいは政府というものを持たなかったがために、ナショナルな英雄という存在が誕生する環境に置かれていなかったということを示している。そのため、『覇王別姫』の項羽のような命をかけて国を守り臣下を守るといった型の英雄は香港人の意識の中には存在しないのである。

そのような香港社会に生まれ育った李碧華にとって、小楼を「英雄」として完結させるのは本意ではなかった。しかし、映画化によって書き換えられた結末では、小説で描かれている「英雄」の香港での平凡で侘しい末路の部分が消され、蝶衣の死によって「英雄」の存在を完全なものにしてしまっている。

実際、文革時期に香港に移民してきた中国人は、それぞれに過去を背負った人物であった。何気なく香港の街を行き来する人々も過去において劇的な経験をしてきた人物であるかもしれない。しかし、それは過ぎてしまえば、ただの平凡な人間のありきたりな人生に戻るのであり、多くの香港移民がそれを経験してきた。李碧華は、北京では京劇の花形役者として名声を誇ってきた小楼を香港に移民させ、路面電車の運転手という「英雄」とは程遠い生活を送らせることで、そのような様々なものを背負った人々をも受け入れてきた香港という都市を描き出しているのである。

おわりに

一九九七年の香港返還は香港にとって大きな鍵となると見られていたが、「香港アイデンティティー」に関しても大きな作用を持った。政治への危機感による外国への移民の動きに反動して、香港という都市を再認識し、「香港人」としてのアイデンティティーを模索しようとする動きが出てきた。そのような動きは、香港の歴史がもたらした複数の植民地主義に植え付けられた既成概念及び規範観念に対する抵抗とともに進んできたといえる。

香港文学批評の歴史がそうであったように、規範観念を否定し、規範によって迫害され、香港人自らも否定してきた独自の文化を認識し直すことによって、「香港アイデンティティー」が見えてくる。

藤井省三氏は、『覇王別姫』と同時期に書かれた李碧華の小説『胭脂扣』に関して、現世で結ばれない愛のため

に自ら命を絶ったヒロインと「香港アイデンティティー」について以下のように述べている。

・・・香港におけるアイデンティティと文化との密接だが脆弱な関係及び状況下において、李碧華は・・五〇年前の過去からヒロインを召喚し、・・・愛のために死に愛のために五〇年間待ち続ける香港人ヒロインを描き出したのだ。・・・愛＝理想を追求するものこそ美しく、臆病に生きるものには辛く醜い余生が待つばかりであると読者に語りかけているのだ。・・・そのような愛のため、自由と独立のために命をかける香港人の伝統にアイデンティティを見出すことにより、香港市民は大きな変化が予想される「一国二制度」下の五〇年を生き抜こうと『胭脂扣』は語りかけているのではあるまいか。[16]

しかし、小説『覇王別姫』において李碧華は、愛＝理想のために命をかけるべきであるという美徳の概念そのものに疑問を投げかけているのではないだろうか。

小説『覇王別記』と大陸中国の監督の意向が色濃く反映されている映画版『覇王別姫』を比較することで、香港作家・李碧華の主張が見えてくる。李碧華が書き換えられた結末に対して抱いた不満というのは、香港という都市で物語を終らせることが出来なかったということもさりながら、李碧華が描きたかった、社会的に行われている暗示によって仕組まれてきた女性像や国家や文化によって生み出された伝統的な英雄像といった、既成観念によってつくりあげられてきた虚像の破壊と、既成概念の顛覆の後に残るいやがうえにも実感する現実の存在が消されてしまったことにあるのではないだろうか。

注

（1）「本土意識」とも。「香港アイデンティティー」とほぼ同義。

(2) 文字言語としての中文（Chinese）に音声言語としての広東語（Cantonese）成分が加わったもの。

(3) 香港文学研究や批評において、風潮として、作品あるいは作家を「厳粛」と「通俗（大衆、流行）」という対立する二項に分類し、それぞれを「高雅」と「低俗」とする、単純化された図式を用いて評価が行われてきた。多くの研究者がその安易な分類の危険性を指摘しているものの、現在でも広く行われている。

(4) 比較的詳細なものに『香港文学作家略伝』市政局公共図書館出版　一九九六年、『一九九七年香港文学年鑑』香港文学年鑑学会出版　一九九九年等がある。

(5) 一九五二年に発行された総合的刊行物。短命な雑誌が多い中で、一九七四年に廃刊されるまで二十二年の長きにわたり、学生や無名の作家に作品発表の場を与えてきた。西西や亦舒など現在活躍している作家の多くが学生時代や無名時代に作品を投稿している。

(6) 『七女性』『獅子山下』『江湖再見』など。その多くが公営放送局である香港電台にシナリオライターとして勤務していたときに執筆したものである。

(7) 小説が映画化されたものと映画の脚本が小説化されたものを合せ、『胭脂扣』（邦題ルージュ）、『川島芳子』（邦題：川島芳子）、『青蛇』（邦題：青蛇転生）、『秦俑』（邦題：テラコッタ・ウォリア　秦俑）など七本。

(8) 費勇は「大衆文化消費的普及與通俗小説的変化」『香港文学史』香港作家出版社　一九九七年において「消費社会」である香港において、通俗文学の作品も「消費」されるものとして、繁忙な香港社会に適応し、手軽に短時間で読めるような「軽、薄、短、小」の条件を備えるようになったと言っており、黄維梁は『香港文学再探』（香江出版有限公司　一九九六年）において、「最も色濃く香港の特色を有した文学」である新聞雑誌のコラムは、香港人に最も受容されやすい「軽薄短小」という条件を有したジャンルの文学作品だと述べている。

(9) 馮偉才は「有些残余的記憶在我身上，抹不去……――専訪李碧華」『読書人』一九八八年第八期で「『覇王別姫』がもっと「文学的」な作家の作品であれば、もう少し高い評価を得ていたであろう」と批評している。

(10) 李焯雄「名字的故事――李碧華《胭脂扣》文本分析」『香港文学探賞』三聯書店（香港）有限公司　一九九一年十二月

(11) 日本でも『さらばわが愛』という邦題で一九九四年に劇場公開され、高い評価と興行成績を得ている。

(12) 筆者が二〇〇〇年八月に行った李碧華へのインタビューの中で、李碧華が語ったものによる。
(13) 陳麗芬「普及文化與歴史想像—李碧華的聯想」『現代文学與文化想像』書林出版有限公司　二〇〇〇年五月
(14) 括弧つきの「女性」は、「生物学的性」としての女性ではなく、「社会的につくりあげられた性」としての女性を示す。
(15) 一九五〇年代に金庸、梁羽生らによって香港で生まれ、六〇年代に一大ブームを巻き起こした。通俗小説四大ジャンルのひとつといわれ、現在でも多くの読者を得ている。
(16) 藤井省三「李碧華『胭脂扣』と香港アイデンティティ—都市の記憶としての小説」　一九九九年